萬葉拾穗抄 十

3890　3891　3892　3893　3894　3898　3899

大伴卿 旅人也
續日本紀十一日天平三年七月辛未従二位大伴宿祢旅人薨難波朝右大臣大紫長徳之孫贈従二位安麻呂之第一子也
此集撰者家持乃父也

萬葉集巻第十七

天平二年庚午十一月太宰帥大伴卿被任大納言兼帥如舊上京之時傔従等別取海路入京於是悲傷羇旅各陳所心作歌十首

三野連石守

わかせこをあかまつはらよ見わたせはあまをとめとも玉もかるみゆ
（和我勢兒乎 安我松原欲 見渡婆 安麻乎等女登毛 多麻藻可流美由）

作者未詳

荒津乃海しほひしほみち時はあれといつれの時かわかこひさらん
（荒津乃海 之保悲思保美知 時波安礼登 伊頭礼乃時加 吾孤悲射良牟）

いそことにあまのつり船はてにけりわかふねはてんいそのしらなく
（伊蘇 海夫 家里 我 伊蘇）

きのふこそふなではせしかいさなとりひちきのなたをけふみつるかも
（伊佐魚取 比治奇乃奈太 今日）

淡路嶋とわたる船のかちまにもわれはわすれすいへをしそおもふ
（刀和多流 可治 吾 伊弊 於毛布）

大船のうへにしをれはあまくものたときもしらすうたこへわかせ
（安麻久毛 居 多度伎 哥乞 和我世）

あまをとめいさりたくひのおほほしくつのの松原おもほゆるかも
（海未通女 伊射里多久 於煩保之久 都努乃松原 於母保由流）

多麻波夜須 武庫能和多
ものをやとむこれわくらはのうらめなる仙
日かげくいはねのうつもれるあきこそおもの漁火
りるも物おもはれいかりもちくとをきつのわかをそ
けれのくもゐやと武庫の
山辺よりこぎ来る舟の上にて
くらゐれやな舟の上にて
ほり 童蒙抄云武
庫こほの西よ生
こもやまとい稚に海のうりあるものをまてをねかりつ
ほり仙人のすむといふ所をいふ
いつさきんこともしくこころ
いつさきんこともしくこころ
ゆく雲よ家を遠くとよめる意
八雲御抄同日の暮れに家乃遠
ものくもしゆきよ仙日ゆきとよめる心
つもしきよまとい奥しきよまとの

おろうそのものくもうこともきよすゆくをも
うりうんこと同
乃をれ北つきと
こまりつの船のり
船みくおもれは
をこるるやうやもたち
ほるることもをの家
乳こと
追和太宰之時梅花新歌
是此集五云天平二年正
月十三日帥老之宅
賦園梅聊成短篇中書
こて梅花の奇此二
首るいまし十二年十一
月よ追和すと
今ゆいしさすい

十年七月七日之夜獨仰二天漢一聊
述懐一首 大伴宿祢家持
多奈波多 舩楽 麻蘇
あるるの山ものりすしまよ漢
きよきよ月をりやいこころわる
追和太宰之時梅花新歌六首
十二年十一月九日作 大伴宿祢家持
民布由都豊芳流 為梅能花奈
今ゆいしるいまきこるいまきれと梅の花
遠流 奈之
君ゐしいおる人もも
為梅乃花 美夜萬等之累
うめのをゑ今やまさらふりりとりや

3903
如此 乃木 波 安可合 勢年
かくのごとそれこそありけめ
春雨はもえ〳〵やまなくにうめの
毛能之 揚家 疑可鳥梅 物能香岡
花をたれか常かものも

3904
神さびやまと奥山と日本紀に大山と云くみやまと訓り
吉野と云詞を書れたるに常ならぬ時也吉野は
山ぢかきゆへ也いにしへさかりなる山ぢの風をよめる
歌のうつれるとも見ゆ
又安云〳〵今の大山いまだ雪をもとゞめ
ず二月下旬ならんとこゝろ得べし
春雨小柳梅の類乃ち梅の咲て常ならぬ
春雨ふりしかば
宇梅
うめの花いつの間にかこゝとつもれる
佐吉乃 盛
又安云さきだれさくらこそ
さきだれのいはまもなくふりしけば
遊
梅の咲て盛に散ゆくを
いつの間にかこゝとつもるとは

3905
平理 加謝思
ありつゝもいたもひまなみ
御苑布 百
みそのふのちるを雪こそありけめ
宇梅 落 安来
梅のちるを雪とみるは

3906
意毛比
いとゞいはねもそ
あそふうれみき
ゆのまにこひまさりけり
みそのふのこと
百本報多の梅に下
句の意梅乃雪共こそ
讃二三香原新都ヲ詠る注
讃二三香原新都ヲ詠る 仙田若
咲ほこりて 仙田若
咲のごとし
みかきせる 水尾走る
あやうのふの山吹
イねそせる 仙田帯
せる 重業常ふせる細
谷ほのぬ久迩の都乃
常ゆせる泉河のこと

3907
讃二三香原新都ヲ詠歌一首并短歌 天平十三年
二月 作レ之
右馬寮頭境部宿祢老麻呂
山吹乃 久尓
咲ほこりたる 平二理
山吹を 葉
黄 可美都瀬
見イ那波流瀬 泉 河
かはづ鳴 和多之
うら悲 宇知
振たる 宇都
清き 安里 飛欲比
瀬の 流
うつろひ
見れど
わたしの

万代乎
反歌
楢 並而伊豆美 河波 水緒多要受
してあらそいつみかけりかみやこに
大
けりへりんおおみや

詠霍公鳥歌二首 四月二日 従
祭良宅贈兄家持
大伴宿祢書持
多知婆奈 常
保登等芸須
ちりまがいとこのおふとのあとさきす

ふまひんうたきう
ぬ河行もおきそ
珠ぬくまでも
捧ぜんこまで
月立つ日よりまで
まで、茅花をぬく
或ハ棟實を要き
しなくまれいこころ
橙橘 元哥乃小序心和
名云橙七卷食經云橙
宅耕反和名ユズキ俗
柚而小者也
ひさかたの雨
仙曰木のまもりも
こハ立つ 神乃座
おくてきすなのに

周無 来 鳴者
すむこまさうねけおろん
珠 亦奴久 安布知 宅
もりぬくけもちをいようこん
夜麻
やま霍公鳥
橙橘初咲霍公鳥鶯對此時候
誰不賞志因作三首短歌以散欝
結之緒耳三首 四月三日 自
久 迎京師送与書持
内舎人大伴宿祢家持
遥

ひさかたの山ゆとれいかうてきす
木際 多知久 吉 奈之
まもりもくてこおうねけいる
奈加乃 情
おうてきすなおふかうろうもの
多知

3913 3914 3915 3916 3917 3918

そもなにの心にてなく心ぞと
よめるなるや又橘の金
玉乃ごとくちるを云也
ほとゝきすあふちの
楝花は相咲ちらん實乃
玉と見るとなるまで也
交遊集宴 朋友よし
りのあそひてつどひ
て酒宴するなり
ほとゝきす今し
今しのしハ助字也
交遊集宴あれば此
まちつへハいと長一入
なるへし千代よの
美談するんとぞめでし
明人 赤人と同人也や
かしひきの山谷越て
仙日仮りさとうつき
は芳野つきたり
鶯るゝとぞ也 鶯
橘乃にほへる香をし
句目白き部分を段
のにおひしもひるなり
此橘のにほへる香をも
やよつろひぬへしらん
ことかし
ほとゝきすなく思
仙日ハ部を方の真鳴
橘の細さし垂る
ハ枝すかへんとよむ
るとま東くれずも
雅すと同歌也

玉ぬく月し来鳴とよもる（多麻奴久 之 登餘牟流）

ほとゝきすあふちの枝にゆきて居は花はちらんな珠と見るまて（安不知 居）

思霍公鳥謌一首

傳曰一時交遊集宴此日此處霍公鳥不喧仍作歌以陳思慕之意但其宴所并年月未得詳審也

田口朝臣馬長

ほとゝきす今しきなかは万代よかたりつくへくおもほゆるかも（可多理 所念）

詠春鶯謌一首 年月所處未得詳審但随聞之記載於茲

山部宿祢明人

あしひきの山谷こえて野つかさに今は鳴らんうくひすの声（豆加佐 者 鳴）

十六年四月五日獨居平城故郷作歌六首 大伴宿祢家持

橘のにほへる香かもほとゝきすなく夜の雨にうつろひぬらん

ほとゝきす夜聲なつかしあみさゝは花はすくともかれすかもなん（音 奈都可思 安美指者）

橘のにほへる苑にほとゝきす鳴とひとつくあみさゝましを

橘乃旬てるその小
人けくい告るく
細波てゐしとき
うをおよくるの如ハ
と郭公本まく
あくの如くなれ
さくら小亭小平城古郷
と詠る心ハ聖武帝天
平十三年より奈良
に恭仁都ありて天
平十六年二月小橋の
あくく郭公とゝもなく
うくくると詠る心ハ
聖武帝ハ恭仁都ニ
ましまして平城古郷
を恋給ふ心ハ
なり

左大臣橘卿 諸兄公
于時左大臣従一位

大納言藤原豊成朝臣
于時中納言従三位天
平二十年三月壬辰授二
従二位一拝二大納言一續日本紀十七

与二群臣一宴歌
うくす八洲内の
巨勢奈氏麻呂 天平十五
年中納言従三位
大伴宿祢 従四位上 天平十
三原王 五年

[注] 仙注同 玉栄 杜若を杜衣
と掛けるは 公集考七 江の漲涙をの〳〵杜の衣かすりなき
ん月ころ

天平十八年正月白雪多零積地數
寸也於是左大臣橘卿率二大納言藤
原豊成朝臣一及諸王諸臣等一入二太
上天皇元正天皇御在所一中宮西院供奉掃雪
於是降詔大臣参議并諸王卿一令侍
于大殿上諸卿大夫者令侍二于南細殿一而則賜二酒肆宴一勅曰汝諸王卿等
聊賦二此雪各奏一其詞一五首 藤原豊成朝臣 巨勢奈
氏麻呂朝臣 大伴宿祢 藤原仲
麻呂朝臣 三原王 智奴王 船王 邑知

毛等保登等藝須 不鳴
ゝしおさ〳〵すさのをの
鶏 鳴 布流之
うつるくみつ〳〵れこ
屋度
花橘乃ふかこの
加吉 都婢多 麻須良我
かきつはたいつ 衣 きぬ
服 曽比 須流
もさうひする月ハきふくる
[注] 遷都
ゝ
平十六年二月小橋の雑歌に遷都の
あるくく郭公とゝもなくうつるくと
うつるくみつ〳〵と詠る心ハ聖武帝ハ恭仁
都ニ御坐ましくて平城古郷を
恋給ふ心なり
[注] 仙注同 玉栄 杜若を杜衣と掛けるは 公集考七 江の漲涙をの〳〵杜の衣かすりなき
ん月ころ
[注] 仙注同 玉栄 杜若を杜衣と掛けるは 公集考七 江の漲涙をの〳〵杜の衣かすりなき
ん月ころ

智奴王　正四位下　木工頭
船王　従四位上
邑知王　ムラトモノ王ホキミ
山田王
林王　圖書頭　従五位下
穗積朝臣老　正五位上
小田朝臣諸人
小野朝臣綱手　内藏頭　従五位下
高橋朝臣國足　従五位下
秦忌寸朝元
楯原造東人　従五位下

右以續日本紀考之

治部大輔　正五位下十八年五月任武藏守　續日本紀

紀朝臣男梶　天平十五年弾正弼　十六年従五位下

葛井連諸會　天平十七年四月外従五位下

春雪ヲ喜ヒ多之嘉瑞トイヒ韓退之之詞

持ツ従五位下ノ

王　山田王　林王　穗積朝臣老　小田朝臣諸人　小野朝臣綱手　高橋朝臣國足　秦忌寸朝元　楯原造東人等應詔作歌依テ次奏之登時不記其歌漏失也　秦忌寸朝元者左大臣橘卿諱云麻呂歌以爵賜之乃用此黙已也　諸兄ノ

左大臣橘宿祢　諸兄ノ

市流由吉乃之路髮　大皇

貴

久母

紀朝臣清人　布流

天下　須泥尓

紀朝臣男梶　見延　受平登都日

比加里見

可吉

今月　由吉

葛井連諸會　久須井ノムラジ　婆自米　豊乃登之

大伴宿禰家持　大宮　宇知　零　須

3932 3931 3930 3929 3928 3927

以天平十八年閏七月
按續日本紀十四日天平十八年六月壬寅從五位下大伴家持爲越中守とあれは任之月と云内二月をおくれし
とりきるゆゑ
草枕旅ゆく君を
旅行あれと祝ふ
酒瓶を床上にすゑてまつるといふ
いはひへは齋瓮也お注
いまのごと恋しく君か
別るしの如くはなれ
こし恋しくいふし恋
もふいふ恋もまさる也

大伴宿禰家持以天平十八年閏七月被任越中國守即取七月赴任所於時姑大伴氏坂上郎女贈家持歌二首

くさまくらたびゆくきみをさきくあれといはひへすゑつあがとこのへに
（久佐麻久良 多妣 伊波比倍 安我）

いまのごとこひしくきみがおもほえばいかにかもせむするすべのなさ
（伊麻能其等 古非之久 吉美我 伊可尓可母）

更贈越中國歌二首
大伴氏坂上郎女

旅にいにし君しも継て
いめにみゆは行
つゞきて夢に見ゆるを
いふ行所恋乃故也
かこゆるやしんそ
みちの中國つ神は
越中乃國中の神と
云ふ越中をコシノミチ
ノナカノクニと和名にも
よめり旅行も志別
知ね人を恵むへき
云めくみたまはな
恵みをされのへと云
きみにわか名はす
でに立田山よそ
絶の恋わすれいふる

たびにいにしきみしもつぎていめにみゆあがかたこひのしげければかも
（多妣 安我 加多 吉米 伊米尓）

みちのなかくにつみかみはたびゆきもしらぬきみをめぐみたまはな

贈越中守大伴宿禰家持歌二首
平郡氏女郎
（來非一度時時便使取贈也）

きみによりわがなはすでにたつたやまたえたるこひのしげきころかも

すまひとのうみへつねさらずやくしほのからきこひをもあれはするかも
（須麻比等 夜久之保）

うつさりてのちとありんこそり
都由
ぬしかのちとつきてわれ
おうくふつおいやすくんきみうめを
目
久すひさまうくすすおうくし
之多由
こゝりねのきこゆ 志良奈美
自波のいちうくいねひとのきうくく
きまうくいかきりくのこや
きみをやりぬくあうこひをんん
平浪牟 奴婆多麻
かくのこやあうこひちんぬいあれ
ひしふきさけすて
さちうくきみまりおいこひめやと
きふおりひあまうくやきつき
よろ川代なこうへうけてわうせこう
都と美之牟見 都追
ぬしぬをんつきのひりよつし
代ふ例乃加宇之方乃ふかいうちうけく
ありけしあきおうくつきれを牟紀をれ西うくそつし

等花ちいふうきの枝ふ出ふ思すう乃
きうちくいねあう意をんん
かくのこやあう意をんん
有りぬすかのう
安きこもれすかのう
意をうくきうくし
家拍平上人かく多時
き可里人内く成のりく
やくいう御おをとうく
ひ一御さよ今受拉
志て主宮をうれ里迦て
成のひてふ親意れと
よろつ代の志いうみて
ふくけしあきおうくつきれを牟紀をれ西うくそつし

ハ流めるに左今ニ将来れハの〈ふにゐて〉め花ハうまれ人の流はすくゐる
〈まと読しるひまや莺をつくりの歌も有

3941
鴬乃なくくらたにうちはめて　久良　多介
やけはしぬともきみをしまたん

鴬乃なくくらたに
足曳云くらき谷ニ谷
也うちそめてハ身をなか
くる也玉東仕義ホよるハ
焼死ぬとも君を待
〈まとある也但仙おに云

3942
まつのはなはなかすにしもわかせこか　麻都能波奈　和我勢故
おもへらなくにもとなさきつつ　於毋敝良奈久尓

うちそめくハうちそはめてと云也やけハしぬるともハ為ぬる
こと云し心ハ鴬のなく谷ニ打はめて焼ころしたまふともかまハ
すくらも君をまたんとよめるなりて　君をまつと不ぬ所用足安ヲ
松乃花も数ふし　松花ハ春咲物なり花のやうにも見えねハ花の数
にも入らすと云し　心ハ松花を平群氏女か身ニ比してよみて送れりと云也
守　越中守也家持の
当友し次乃作者池主
を極とも越中掾也

八月七日ノ夜集ニ于守大伴ノ宿祢家持
舘ニ宴スル歌十二首　大伴宿禰家持

3943
秋乃田乃ほむきみかてりわかせこか　乃穂　牟伎　我氐里
ふさたをりけるをみなへしかも　布左　乎　美奈敝之
掾大伴宿祢池主

秋乃田乃穂むきさハ稲乃穂立
をみるついでにと云心
此歌ハ花かつさをよ
よしめる也

3944
をみなへしさきたるのへをゆきめくり　野邊
きみをおもひてたもとほりきぬ

女郎花咲たる野へを
こころをとりさねを
立もとほりきぬるとよ

3945
あきのよハあかつきさむししろたへの　河加登吉
妹かころもてきんよしもかも　之　衣　袖

秋乃夜ハあかつき
あかつきさむし暁

3946
ほとときすなきてすきにしをかひから　須疑尓之　乎加備可良
秋風ふきぬよしもあらなくに　布キ
守大伴宿祢家持

ほとときす鳴く
足安云をかひハ
思ふるし平東夜
のかし郭公鳴過
今ハ秋風吹ぬ
情猿懐せんかたなき

元年之登保都比等

けさ乃あさけ秋風
をいた人のきの人
屋ハきりまれハ
おもふてをとよ
あまさうるひるよ
いあくよ及てわれと
いまこそみてわす
しもこの心し
うゆまさうるひるふ

歴奴 比奈

ぬきられとも
ひて一納をとさもあけるふ

拯大伴宿禰池主

加里

いつまさうるひるふかるわれとうるかも
いとゝきさけてをもふすめや

寔家にいうるうとハ
寧もくいやうの羽とのるり羽昭神物にいうるかいうる
とりふそてはやを川辺仙えいうるうとハふるこつ羽とること
をも表撰式乃法を用ゆしこゝ皆持つさゝ中かゝ宅家つ法統
をて用くこうひるとさゝきてとハ仙回納らすて亦ん

大伴宿祢家持

伊敝

いへのてひてひもとらさけと

念

おもふこころをれりきんと

大目秦忌寸八千嶋

タイサクンハタノイミキ ヤチ

日暁之

ひとゝりあきぬるときこをきゝ

平美奈敝之

さゝきる野鳥をゆきつゝへて

大伴宿祢家持

都可比

屋ろ祢ハきりかこんとさわくらん

佐和久良武

秋風さむみうのかりのよ

思 並与て

るおめていさうちゆふきふふ乃

やとよめる

いへのてひてひもとらさけと

家ゆくひとにかたらせる

ことあをとてつかハせる

心をきゝこんと

ものしい助宅

ひとゝりあきぬる

八月廿日乃暮あをと

里合せて心ハ

屋ろ祢きりのよ

秋風もさむくきれ

ひるれ伴のふ

こんとさゝきてきこらん

むとをも藤武う

心りきる

伊藤未

奈弥

史生土師宿祢道良

歌波布氣奴良之

大原高安真人

伊久里

古歌一首 等月不審但隨聞

古歌時記載茲僧玄勝傳誦之

大目秦忌寸八千嶋

宴居客屋望蒼海主人作歌一首

伊麻こん春をしねのもの

いそりのもれ益のも

古歌一首 等月不審但隨聞

古歌時記載茲僧玄勝傳誦之

大原高安真人

伊久里

欲波布氣奴良之

史生土師宿祢道良

奈弥

万十七 十三

奈古乃あれつるをるおねいはこそ

みかへ那うちてあてこきてめ

哀傷長逝之等歌一首并短歌天

平十八年秋九月二十五日遥聞

等妻感傷作之

越中守大伴宿祢家持

北奈

おもおさめめて

麻氣乃麻尓

大王

おもの名れ

まま尓

好去而

駐

奈古乃あれつるをるおねいはこそ

みかへ那うちてあてこきてめ

哀傷長逝之等歌一首并短歌天

平十八年秋九月二十五日遥聞

等妻感傷作之

越中守大伴宿祢家持

北奈

おもおさめめて

麻氣乃麻尓

大王

おもの名れ

まま尓

好去而

駐

也とく今別るゝとも
相言我ゆかん平安に
祝ひてまてよとし
いはひてまつらそ契
用ゐきん
こし日乃きはみ吹云
別くまし日の限を
しるをみ俗名を並と
也といふ羽乃助也
へありて有は仙陶の
ありておれはとくえ背
うましみと京の使
それは嬉しそ待つけ
向かれはとも
まはつまれ忍雲
をとつまと丑東被使

君乃遊とはまさと
まれされたることそいふ也
たはこととは戯言也
はしきよし弟をほめ
て云詞也と云詞
なせのみことゝ兄云
弟のこと也
何しかも時しはあらんを
穂に出秋のはきの花を云
ほすゝきや咲にほへる
あさにはにならしは助字
也此は弟乃須ふことより弟在世の事をいひて寝院の庭を
いてたち出なとこゝに萩白るはな庭を踏むならしまて
佐保山より火葬せりまて彼山乃まにたなひくを見こあなしと云也
乃使乃我に告つる事をあれはてしさまくの事也又ねずは夜をあそびくと
注寝院は寝殿と同し

平けくいはひて待とかたらひて（可多良比　ミテ　イハツ）
こし日乃きはみ玉ほこの道をたとほみ（比）
山河乃へなりてあれはこひしく（漱奈里氐　孤悲之家口）
けなかきものを見まくほりおもふ（氣奈我枳　麻久保里　念）
あひたに玉つさ乃使乃くれは（アイタ　家礼婆）
うれしみとあかまちとふにおよつれの（安我麻知刀敷）
たはことゝかもはしきよしなせ（多婆許登　奈弟）
乃みことなにしかも時しはあらんを
はたすゝき穂に出る秋のはきの（芽子）
にほへるやとをあさにはに出たちならし（尓保敝流屋戸　安佐爾波）
ゆふにはにふみたひらけす佐保（奈良之　暮　敷美多比良氣受）
乃うちの里を往過あしひきの山の
このくれに白雲にたちたなひくと
あれにつけつる

斯人為レ性好二愛花草花樹一而多植二於寝院之庭一故謂二之花薫庭一也佐保山火葬故謂二之佐保乃宇知乃佐刀乎由吉須疑一

反歌

まさきくといひて
妹が平けく待ち
てそといひし心忘れ
ぬ古之能宇美
山のこねの白雪
ふみわけて
かくらんこともえ
知らねども
別れし時ゆ
思ひ渡れば
大帳使
本任
弾絲 琴也
是也 是日也 乞可用
二眺 雪と漢文のかりめ
雪ふみわけて
雪ふる雪いちじるく
雪ふる雪降ること
ふりつもる
杜曲也 家持の
病ふせて
おもふ
ひとりさ
いきてもいまさ
なりもとく

まさきくといひて
妹が平けく待ち
てそといひし心忘れ
ぬ古之能宇美
山のこねの白雪
ふみわけて
かくらんこともえ
知らねども
別れし時ゆ
思ひ渡れば
大帳使
本任
弾絲 琴也
是也 是日也 乞可用
二眺 雪と漢文のかりめ
雪ふみわけて
雪ふる雪いちじるく

大伴宿祢家持

天平十八年八月椽大
相歓歌二首
伴宿祢池主門大帳使赴京
師而同年十一月還到本任仍設詩酒
之宴弾絲飲樂是也 白雪忽降積地尺
餘此時也 復漁夫之船入海
浮瀾而寄情二眺聊裁悲心

大伴宿祢家持

雪ふる雪いちじるく
雪ふる雪降ること
ふりつもる
杜曲也 家持の
病ふせて
おもふ
ひとりさ
いきてもいまさ
なりもとく

相歓歌 伴宿祢池主門大帳使赴京
師而同年十一月還到本任仍設詩酒
之宴弾絲飲樂是也 白雪忽降積地尺
餘此時也 復漁夫之船入海
浮瀾而寄情二眺聊裁悲心

大伴宿祢家持

天平十八年八月椽大

古之能宇美
安里蘇

おもひくまさきをのりてまつ
白浪乃
伊蘇 榜
登流
可治
船の
かぢ
忽沉枉疾殆臨泉路仍作歌詞以
申悲緒一首并短歌 天平十九
年春二月二十日作

大伴宿祢家持

大王 麻氣
おほきみの 大支
心 情
あまさかる
山坂こえて
あまとぶや
いそべをみつつ
あまをとめ

うちおひさとふ
わすれて病床ふ伏
てけくの痛むを
そのみうし吹ふ青乃
余ことをおふも身の
なてるみ古ふ祖母
ゆくらふ仙台ゆ
ふとりの
きこひとふ祖母
ゆきふく心遣る
てきうし書とう
めるうへ入てけや
しこ同く女をよ
うとるけてう
うくこ祖母うと

らぬふうつせみの代乃人われいうち
おひきこふこひつ伊多家苦之介志
てけくの日ふ異益
けふませいうちねりてのみてこの
大船乃由久良ふ
てくるきてなうつ
もこんとまうん情左丈之苦
てきうつれをもあけれ
いけよもこそもてをおりて
つふされいこうちつ
ぬてのふ波母要奴
こあけてんういてもわさ

兒等毛
こそもいをもこなさわきてくらん
美知乎多騰保弥間
みちとうこをみよ仮も
るるこ乃
やるうもおもうさこと
情波母要奴
てやすこるふしこうねぬ
伊乃知
るきうるいのちおけ
たときをきふかくきてやおし
安良志
乎
をすふおけきみせん

反歌

世るてかするきこのう春花の
知里能麻我比
ちり乃ふよきぬさおりい

ふてもわきこ手
婦ら見ともさか
きるもし
一こ乃ふ
ま仮も
仮をきて
て又仮をやまをき
ちうきまし仮やう
ふうきこてと
いひやすと
心もしぬとゆる
余乃けこ情なれそ
乃一と仙台荒増推
同言(コト)玉葉すてお
す物さ伏ちんこ
世乃ふく物ふきねう

山のうきことをとりそきよ
いもをあひそすやくやもそろん

天平二十年二月二十九日贈ル二極
大伴宿祢池主ニ悲歌二首

守大伴宿祢家持

忽沉ニ枉疾ニ累旬ヲ痛苦纏特百神ニ且得メ
消損而由身體疼羸筋力怯軟未堪ニ
展謝ニ係懸弥深レ方今春朝春花流馥
於春苑ノ春暮春鶯轉ル聲於春林ノ蓚此
節候ニ琴罇可ト翫矣雖ト有ル衆興ニ之感不

ととのへりし古事也
策杖
惟惺之裡 史記の字
解玉顔 玉ひもとく心
前漢匡衡傳の通
仙曰 ここをもて
こいをのかす也 万葉
ふる春雨を詠
うらもなの咲ちるす
いつく木陰をかれんと
沽洗 二月也
忽屡芳音 序意
よこと心ぼそき道

耐ニ策杖之勞ヲ獨臥ニ惟惺之裏ニ聊作ニ
寸分之歌ヲ軽奉ニ机下ニ犯ニ解玉顔ニ其
詞ニ曰

そらもなるかにさくらはな
おもくもんもちるもしらなく
うつのとりもきなきすもん春の花
いたしらきみとこおもかさらん

沽洗ニ二日報ニ守大伴宿祢家持ニ
歌二首

大伴宿祢池主

忽ニ屡ス芳音ヲ翰苑凌雲魚魯倭詩ヲ詞

林舒錦以吟以詠能繙綴春可樂
暮春風景最可怜紅桃灼灼戯蝶迴
花儛翠柳依依嬌鶯隠葉歌可樂哉
淡交促席得意忘言樂矣羙矣幽襟
足賞豈慮平蘭蕙隔蕖琴尊無用
空過令節物色軽人平耶悠有此不
能默已俗語云以藤續錦聊擬談咲
耳

やまかひさくるらくとくひとめ
きみかこせくいおかをっなりうん

輪苑凌雲筆力乃俗
ちねり引馬相如賦有凌雲氣とみ
ことみくっけ
傳詩再唱
詞林舒錦おもひ
繙綴緒山高とそ
ちなきとそ立ちて
をこれりと
淡交君子交淡如水
小人交甘如醴幽襟心中乃こと
いつしむこころ
蘭蕙隔蕖きよくさき
乃ゆうかなるもの
空過令節日當時

宇具比須
うひとのさちくやまみさうかも
波奈
きみっるみれをもいちめやも

三月三日更贈稼大伴池主歌一首
并短歌

守大伴宿祢家持

含弘之徳寓恩蓬蠡不貲之思報
慰陋心戴荷未春無堪兵喩也但
以稚時不渉遊藝之庭横翰之藻
自乏千彫蟲焉幼年未逕山梯之
門裁歌之趣詞失于聚林笑多厚
以藤續錦之言更題将石同璞之

夜麻吏伎

彫蟲 楊子ノ童子雕蟲篆刻トイヘリ事也
山拔之門 山邊赤人姉
本人丸也 蘇林 許慎
わさとゑ
以蘇續錦 池主の詩を褒
懐癖 わるくせ 仙日多生
ちかさう 人のわるいことを
ふるんれハふさうもうこ
ますわれまよふ同
ここふこゝろ 心
いこけくノ病いもし
うちけくノ又安ふ
欤 一説

詠 因是俗愚懐癖不能黙已仍棒數
行式酬嗤咲其詞曰

おわきみのよしくちおさう
うをおさめかいてこゝまでねき
すよれおりのわれおれいう
ちるひきこゝふこゝろ 已伊布之
日異
ひかくのせいかけくこゝふこゝひ
ゝおけくそこにおひ出おけく
夜須家久奈
うちけすくあふおりふそう
くもきよのをありひまれ 夜麻

敏奈里氏
まえおりてゝあるこのみちれとをけ
遭縁毛奈波
間
お供しやうとしまきる 伊能知
こゝもいつをゝまきる いのちの
けゞ 居而
隠 念 奈氣加比
こゝろのなけかひあく 佐家
さもるこゝろいかまゝのさ
孤尼加里
るやうのりはたゝふゝそゝしおりかさ
ゝとそれ野乃 半登賣良
音
賞れこゝろふさうす をとめらう
春菜 赤裳 久礼奈爲
わかちれはまとれなのあつもの

にうひうひしてあき
えたうち匂ひて花
しのいちはやくも
すうやうつまこうを
作里ごろり
志のつせるその他立ち
秋を当毎のまうる
そくく麻そと
今日も志やうか仙台者
らみといふつゝみも云
乙安云々
おいきのふ物
一月中しも元旦ふ
乃ハ当すゐさねと
やまふれきけみ
こうくいふこと

須具之
宇ム牟流波之

すのそさめふにちひうちてか
よろん河の國里をいくうふす
やとれれ志のくせる君乃心をうるし
美
みせすくふこもねすふ今日とも
めくはこひうくる

反歌

おいきふやまさろつるひと用ふ
きみうくくいれこひめやも
夜麻扶枳
やまふきけみらひう営れ
こゑをきくらんきみいとるも

こゝろも立つき志
いてくてんカとるそ
病ふせる乙敷乃をとて
くちふ立てしゝも
利くすると毛ふく
ゆくゑ仙台心うも
とふ心利さうもと
麗景うりき風重
柳色含苔梅と苔と
みうりのさことにうくる
携手 文友 松葉のさ色
蘭契 叢洪正り金蘭簿
乃くすゐ密友一人
とゐくことにゝ縄乃
等ふ出せ 文蕙蘭
乃契ふゐ見者の心

三月四日贈二守大伴宿祢家持一三日
遊覧詩一首并序

大伴宿祢池主

上巳名辰暮春麗景桃花照瞼以
含紅柳色含苔而競緑千時也携
手曠望江河之畔訪洞逈過野客
之家既而也琴樽得性蘭契和光
嗟乎今日所恨徳星已少歎若不

和寂舎之章何以攄逍遥之趣忽課
短筆聊勒四韻云尒

餘春媚日宜怜賞上巳風光足覧遊
柳陌臨江縡禊服桃源通海泛仙舟
雲罍酌桂三清湛羽爵催人九曲流
縱酔陶心忘彼我酩酊無處不淹留

昨日述短懐今朝汙耳目更承
賜書且奉不次死罪死罪

桃源ハ武陵乃故事
桂三清ハ道家ノ説ニ出ツ

三清湛清桂三盃ノ心羽爵盃心ヲ云ヒ九曲ハ九ノ曲ノ心縱酔陶心ハ酔テ心ヲ陶ハシムル心ナリ酩酊ハ酔ノ甚シキ也昨日述短懐ハ昨日ノ短懐ヲ述ヘシ事ヲ云ヒ汙耳目ハ賜書ヲ汙ス事ヲ云ヒ不次ハ書ノ末ニ書ク詞ニテ不次ニ書ス事ヲ云ヒ死罪ハ恐レ入ル詞ナリ

徳星　蓂求古異苑陳寔字仲弓荀淑字季和仲弓與諸子姪造季和父子討論于時徳星聚大史奏曰五百里内有賢人聚ニ云ヘハ衆人ノ賢人ヲ知ルヲ云ヒ和寂

餘春媚日三月ノ日ノ景ヲ云ヒ可愛ヲ云ヒ上巳凡光三月ノ風景ノ好キヲ云ヒ

柳陌　柳ノ行ル所ヲ云ヒ古服ヲ着ザリシヲ云ヒ桃乃國ハ彼仙境ヲ云ヒ雲罍ハ雲乃如ク雲ヲ畫ケルヲ云ヒ

桂ヲ折テ香ヲ取ルヲ云ヒ三清湛清桂三盃ノ心羽爵盃心ヲ云ヒ九曲ハ九ノ曲ノ心縱酔陶心ハ酔テ心ヲ陶ハシムル心ナリ酩酊ハ酔ノ甚シキ也昨日述短懐ハ昨日ノ短懐ヲ述ヘシ事ヲ云ヒ汙耳目ハ賜書ヲ汙ス事ヲ云ヒ不次ハ書ノ末ニ書ク詞ニテ不次ニ書ス事ヲ云ヒ死罪ハ恐レ入ル詞ナリ

三月五日苔守大伴宿祢家持歌一首并短歌　大伴宿祢池主

不遺下賤頻恵徳音英雲星氣逸調過人智水仁山既韞琳瑯之光彩播江陸海自坐詩書之廊廟騁思非常託情有理七歩成章數篇

満紙ニ乏ニ遣愁人之重患ヲ能除懲者ノ之積思ヲ山柳歌泉比ヘ此ニ如ニ蔵彫ル中ニ龍筆ヲ海ニ蟄然ト得ル看矣方ニ知ル僕之有ヲ幸也敬ア

和歌真詞ニ曰

なりもそのみことのりこそありひさのやま野さりすあすさるいもしおさもるますたやありからのふりをふりしるもちやかふしるはさのにくひそめやこそちぐいさにさわりもさるしよおけ

よりせいみ（ゆ）いにさそよ可受奈枳毛能曽賀るのるへはゆとあるきことのうちるくさることもあんことひとのおれうにぐらくやまぢをさそくちりかくちりかくちりかるくちいちくまるのふすみをもむこちろくこのうてねりめへれるぬのありとすひさをとめへはなひとれてきみよこうこひすりこころろくさみよゆるおこそくおゆい

そせくも

あるりねらふいりんと

こりこいさつさ

ちるしいとのうり

おけりわせ孩く

わりせて

いゆ古りへ

世のゆへねるさ秋り

世さのこくくる

ようこしあれい意

やまぢ山意へ世ず意

りりる世岸乃義

をこの般家務の女

らるる業つまとホ

よりるこ

なからむ　おほ　き子ども　家おもひを　やれ
うるろく　心奇也心あれきも　いさ子かゆゑ　墨　黙
ここハ　あのゆゑ　詞ハ　ふるし　まゐ兵と　山領心　但神中於　三ハ　ことハ　常
にハ　心　こゝろ　ちりの不
やまきにハ　ろく
山吹日　ふるさ　ゝ
我心　家持の
きうて　ふること

反歌

夜麻　支枳
やまきにハ　ろく　ときぬうるうと
安我毛布　於毛保由
おりうるはき　子ハきろく　おりゐ
和我勢故　古非
わりぜこふこひすへおりけりまの
おろよるかうふおれりもし

三月五日　和大伴宿祢池主二詩一首
并短歌

守大伴宿祢家持

昨暮來使幸也以無晩春遊覧之詩今朝累信辱也以賦相招望野之歌一首　并短歌

春娟日乃詩を云
今朝累信　なをわて書
信せ　ゝ　ろ
相招望野之并うの
ろ八方山招　一日
ふ　ゝ　ろ
玉藻　池　ものゝ　ろ云
眺矚　ナカメモテアソフ
下僕　ゐを早ゝ　て云
稟性　わり生れ付乃彫
瑩ちてよく成　き
雅篇　家持の作
ろ　ゝ　ろ
ろ　ゝ　ろ

之詩ヲ今朝ノ累信ハ辱也以賦ス相招望野之歌一首　并短歌

秀句已纏ニ愁緒一非ス此ノ眺ニ翫ニ能暢心平但惟下僕稟性難彫闇神蘇ニ
螢燭ニ翰虧毫對ニ研忘ニ渭終日流ノ綴之不ニ能所謂文章天骨習之不
得也豈堪ニ探ニ字勤韻一叶ニ和雅篇一哉
柳聞鄙里小兒古人言無不ニ酬聊
裁ニ拙詠一敬擬ニ解嘲一焉如今賦ニ言勒
之篇ニ豈殊ニ将石同ニ鍛唱聲遊之曲ニ欲
柳小兒ニ譬盤譜敬ニ呈葉端一式擬乱曰

杪春　三月廿七日の
日比のとやうの心
来燕　ほとゝぎすなり鴫
居ゆる心　鴻ハ
ちるなり　瀛ハ
園君嘯侶　きゝ
乃ち　談
きくこと　秋飲　已
日の後曲のさま
催爵　吾モ盃ノ流サヽ
ちるなり　ちて
心ハ　ちて
ちて　ある
放病　放
あるなり

杪春餘日媚景麗初己和風拂自輕
来燕銜泥賀入歸鴻引蘆洵遊赴瀛
閒君肅侶新流曲楔飲催爵汎河清
雖欲追尋良此宴遅知深慰眺跨汀

短歌一反哥

ちるなりこと　ちて
こゝろやまさを　ちて
ありさまなり　みさを
こゝろ　ちて
ちて　ちて
ありなり

三月二十日夜述懐緒歌一首并短哥
夜裏ニ忽然ト起懐情作ル

大伴宿禰家持　於夜自　多具概礼登

ゆふされば　吾もこゝろぞ　いぬやしき　これと
いやおつぎつぎ　おこれこと
もあふこゝろそ　めぐもあれ
はも　おりゐて　大王の
みことのまゝと　ひきて
野の　あるさうる　いかさめと
別也　荒
その月比き　あり

（以下、和歌本文）

ひさかたの 後成る
ぬばたまの 本名
ももしきの 百敷
あをによし 青丹
あきづしま 秋津島
やまとの国は 大和
かからむと 斯
かねて知りせば 予知
ももづたふ 百伝
いはれの池に 磐余
鳴く鴨を 鳴
見つつ思はむ 見
あをによし 青丹
奈良の山の 奈良
山の際ゆ 際
いさよふ雲は 十六夜
妹が上に 妹
かかりてあらめと 懸
我が思ふ 我
心なぐさに 慰
やまず行かむと 不止
大船の 船
思ひたのみて 頼
さす竿の 棹
流るる水の 流
後も逢はむと 後
大舟の 船
思ひたのむに 頼
言ひし言の 言
故しかも 故
あり通ひつつ 有
見まく欲り 見
我が思ふ 我
妹にしあらねば 妹
玉桙の 道
道行き疲れ 行
夏草の 夏草
思ひしなえて 萎
嘆くらむ 嘆
妹が門見む 門
なびけこの山 靡
反歌二首

ひさかたの天の香具山この夕霞たなびく春立つらしも

ぬばたまの夜も更けぬらし玉の小琴取り出でて爪弾かむため

右の件の歌は、或は云はく、柿本朝臣人麻呂の歌なりといふ。

或は云はく、高市連黒人の歌なりといふ。

或は云はく、春日蔵首老の歌なりといふ。

或は云はく、門部王の歌なりといふ。

或は云はく、紀朝臣鹿人の歌なりといふ。

或は云はく、山部宿禰赤人の歌なりといふ。

或は云はく、大伴宿禰家持の歌なりといふ。

右の件の歌は、或は云はく、柿本朝臣人麻呂の歌なりといふ。

或は云はく、高市連黒人の歌なりといふ。

或は云はく、春日蔵首老の歌なりといふ。

或は云はく、門部王の歌なりといふ。

或は云はく、紀朝臣鹿人の歌なりといふ。

或は云はく、山部宿禰赤人の歌なりといふ。

或は云はく、大伴宿禰家持の歌なりといふ。

立夏既に経て、月を累ねて由未だ聞かず霍公鳥因りて作る恨の歌二首

大伴宿禰家持

ぬばたまの夜も更けぬらし玉の小琴取り出でて爪弾かむため

ももしきの百敷の内の橘は実にも花にも見つつ偲はむ

あをによし青丹奈良の山の際ゆいさよふ雲は妹にしあらねば

ももづたふ磐余の池に鳴く鴨を見つつ思はむ我が心なぐさに

あきづしま秋津島大和の国は神からや見るごとに貴くあるらむ

ひさかたの天の香具山この夕霞たなびく春立つらしも

春花

春日蔵首老

春日より三笠の山に月の船出でにけらしも雲隠り見ゆ

門部王

妹が家に咲きたる梅の散りぬれば我が心しぞ清に流るる

紀朝臣鹿人

我が背子が宿の梅の実なりけむ酸きが上にも思ほゆるかも

山部宿禰赤人

我が背子に我が恋ふらくは奥山の馬酔木の花の今盛りなり

大伴宿禰家持

越中風土、希有橙橘、因此感発於懐、作歌一首并短歌 三月二十日

二上山賦 三首并短歌 三十日 依興作之

大伴宿禰家持

伊波都比古 河泊

二上の 二上
山に 山
神さびて 神
高く貴き 高
二上の 二上
山に 山
鳴く鳥の 鳴
声も変はらず 声
聞けば悲しも 聞

ふごきやまやへ之夫多介能
めうみ乃 ま介乃やまれ志ま ふ乃
佐吉乃安里藤
さやれ乃ま介あさ可ゆふへ
志ま可ゆ美ゆきよ美ち久る志ま乃
やまにいまこゝろなくいもへゆ
ゆれをるかくしこそ久るひとゝ
ろかけく志まのそめ

反歌
之夫多介 佐伎 能安里藤 與須流奈美
志ま ふ乃さ可ゆれ乃ろかよするを
いやしくふかみゆ

多麻久之氣 敷多我美世麻 嗚
るうけまつるみふかきの
こゝろこゝにきこゝをこゝにくり

四月十六日夜裏ニ遥聞テ霍公鳥喧述ル

懐歌一首 大伴宿祢家持

都奇
ぬえどりのうらなきしてからさきす
波流氣之
るくをきゝつゝさとをみし

四月二十日大目秦忌寸八千嶋カ之館ニテ
餞守大伴宿祢家持宴歌二首 守大伴宿祢
家持以正税帳須入京師仍作此歌聊陳相別之嘆

守大伴宿祢家持

餞守大伴宿祢家持

奈呉
なご乃うみのおきつしらなみしくしくに
おもほえんかもたちわかれなば

わがせこはたまにもがもなてにまきて
みつつゆかんをおきていかばをし

家持正税帳を持て上京せしとき八千沼らが饒するにわかるゝ
正税帳 諸国に正税公廨といふあり正税とは天子に
奉る也公廨とは国司の[illegible]正税の帳を持て国司都に参りて
解申すを[illegible]家持もこの年上京せし也越中国より
古は正税公廨ともに[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
布勢水海 越中也
一本注 此海在射水郡

四月二十四日遊覧布勢水海
賦一首并短哥
守大伴宿祢家持

舊江村也[illegible]
賦 うたとよめり[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
長濱 字奈比河皆

物能乃敷
もののふのやそとものをのおもふどち
こころやらんとうまなめてうちくちぶりの
しらなみのありそによするしぶたにの
さきたもとほりまつだえの
ながはますぎてうなひがはきよきせごとに
うかはたちかゆきかくゆき
みつれどもそこもあかにと布勢の
うみにふねうけすゑておきへこぎ
へにこぎみればなぎさには

こそくゝと　えりさやけきうら
みけり　ゆふ日やまぶそふる
のきばわれをいつまかよ
いやうりをにふたちゝし
あうりんいまもえてよと

反歌

布勢能宇美

みせりうみれちまつちるみありそも
いやうりをにふたちゝのりん

今日くゝるまゝ松と
はのりゆふかりかも

て歌んとし
一絶詩乃紅白之同
心よ此十字の意を
あまさしらよめ
しハ助字也唱ふよ
むに
うちあひくゝて
あて非心也ゝの
りてこゝにのふ学
ことをもこゝろの
海を越きと
ゝつ川　そより布
勢の湖よりをふ
すゝり　ゆふかる亀
叫ふあそり　深
来合しゝ

四月二十六日敬和遊覧布勢水
海賦一首并　掾大伴宿祢池主
絶

もちる今ハさきてちりかさうのふ
ハいまさりこおしいさ乃やま
も野ももおらてきすおさてこ
よめいうちあひくゝてふたもの小
ねをもしうゝてをもと
ふらもうゝちもしまくゝ
さりいでゝもこれいみつゝ
今あるのまりあさるまにかゝ

とゝしきたに　ふまれ
くもの日き母
きふこふのあるの路
おり渋谷の渋乃ゐ
砂と何しか月
うゝそ〳〵　浦細
浦乃　ふか白き
まちのいぬき　堀や
ついをぬき〳〵
ついくいく　他今
いとなりくく　業業
ついをこゝにくく
平布乃さき　特
乃久ゝ
ゝきまうひそ
より山渋乃音氣

のさゝ〳〵　きれ　ふくい　ぬのゝ
おいとゝしきたに　ふつてまきゆき
きふこふのゐのうれさきふおきつ
ま今よせそ〳〵　ゆゝさゝりり
かぽ〳〵ふたゐいもゝこめてまきき
ゝもてうゝそ〳〵　布袍のう
うみよおゝねよおかちのいぬき
きろゝこ乃うてゝ乃ゐ〳〵　ゐゝ
てわゝこきこゆ平布乃さき
てをおちりよりいまゝさふいお

さてれは　きてよの渋
枯さゝ〳〵　秋草まゝこ
かもしくくも　先と角
君うたにゃとお乃氣
枯の今よいやこのて
ふふふおさちゝ枯い
むきとゝいてをうみて
君う作せのゆう〳〵
ゝゆゝひおゝやや
うてをえんやむゆゐ
ゆやゐゝゝこと
きゝる今のよせる
枯の君ゝしやて
ゐりんもうちてき
君ふえんこゝをゐ
渋音ゝ　ゝきゝ

かもしりきこさてれる今ゝきゝくと
ゐゝくもこをめりえれともあるす
ゐきさゝ〳〵　ゝ今ちりさきに　そる
さゝ〳〵そるれさきりふかとくゝき
今うたにゃとゝ〳〵こうえとゝきゝ
めゝゝゆる日ゐゝめや

反歌

きゝる今のよそるゝ今ゝよおあゝゝ
けさゝくえふえんきりきこそゐゝ

四月二十六日根大伴宿祢池主

之舘餞(タチニ)税帳使守大伴宿祢家持宴(ニ)歌(ヲ)古歌四首

大伴宿祢家持

ももしきの大宮人は
(佐麻祢歟)
いとねぬる日さへやみこと
云ふねぬる日さへやみこと
(クラノイミキ六)
外内蔵忌寸縄麻呂

わがせこがふへゆきすぎず
おりえんさけさかづきも

和歌

守大伴宿祢家持

(ミツ)水通(キ)槻(ノ)木(ヲ)

石河朝臣水通槻木
(主人大伴宿祢池主傳誦之)

わがやどの槻木の枝をともにみば
ここだくあふひをかざしつべしも

四月二十六日飲宴時主人作
(ス九)
歌一首

守大伴宿祢家持

今やこかほととぎす
あひてとよもすらむ
あひてとよもすらむ

4002 4001 4000

今あんずるにくゞに逢
見えくゆるんぞ
ひるにあかりくす
仙田に弥呂つ称つ
から故に中ふすと云
子東ニのあかり弥之
くぬちことごと
見安云國土神之也
しじにあれども 繁
しげくあれども也
さはにゆけども 多
倍(?)けども之
すめがみのうしきいま
見安云此神のことくは
諸神のわきをいます也
にひかは 新河

四月二十七日立山賦一首并短歌 此山者在新河郡也
大伴宿禰家持

あまさかるひなにかくるこしのなか
くぬちことごとやまはしもしゝにあれ
どもかはゝしもさはにゆけども
すめがみのうしはきいますにひかはの
そのたちやまにとこなつにゆきふり
しきておばせるかたかひがはの
きよきせにあさよひごとにたつ
きりのおもひすぎめやありかよひ
いやとしのはによそのみもふりさ
けみつゝよろづよのかたらひぐさと
いまだみぬひとにもつげんおとのみも
なのみもきゝてともしぶるがね

反歌

たちやまにふりおけるゆきをとこなつに
みれどもあかずかんからならし
かたかひのかはのせきよくゆくみづの
たゆることなくありがよひみん

歌之 立山ニ云ニ之
おばせる 帯にせる之
かたかひかは 八代新河郡
立言此之ひるもなや
雪は至て籍に坂ほ
ぞひるぞやの流之
ぞひるぞやと八河も
ぶりくわかやさ
よそのみも よそにのみ
見るなし又よそ等
夢もことと
ことしぶるがね 見安
云面白と云也 略果
ともしむるもと云
見事かりる也
ちうしに立山に常夏に雪降ぬる云云

る[illegible]こゝは此山乃[illegible]立山権現乃霊跡[illegible]
かしこき川の[illegible]
祇[illegible]
[illegible]
立山乃形を云也[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

四月二十八日敬和立山賦一首并二絶

大伴宿祢池主

あさひさし そがひにみゆる かむながら
みなにおばせる しらくもの ちへをおし
わけ あまそゝり たかきたちやま ふゆなつ
とわくこともなく しろたへに ゆきは
ふりおきて いにしへゆ ありきに
ければ こゞしかも いはのかむさび

こゞしかも いはのかむさび たまきはる
いくよへにけむ たちてゐて みれども
あやし みねたかみ たにをふかみと
おちたぎつ きよきかふちに あささらず
きりたちわたり ゆふされば くもゐたなびき
くもゐなす こゝろもしのに たつきりの
おもひすぐさず ゆくみづの おともさやけく
よろづよに いひつぎゆかむ かはしたえずは

[illegible]
神さび[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]代へけんと[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
祇[illegible]
[illegible]
風[illegible]

てゐるとこと云ふ寺乃云ひつたへ有つくなりいるとそうるく万代もくつゐにきゆんこと云ふの小常なるしるしです山立山乃谷の深きは同かりけれさやうる者

しるしすハ万代小波次んこと

反歌 夜麻

しろやまに降をけふる童蒙抄云しろ山とて城中まてふれし雪常にふるゆへにかくいへりとあるんこと云ふ歌かくのごとく感ずるしるしを称美せるやうなれとも実ハ雪のふるにつけて我波

たちこもりこひつつをれとしるしなき物にしあれハ祝ひの酒をも飲てくらす物思ふ時の酒ハ毒なりと古人の言皆我等乃為ならん

氣受氏

けふもかもしろやまにふる白雪のいやしけよごと

可多加比

たちこもりこひつつをれとしるしなき物にしあれハ祝ひの酒をも飲てくらす物思ふ時の酒ハ毒なりと古人の言皆我等乃為ならん

見流

いまもかもしろやまにふる白雪のいやしけよごと

四月三十日入京漸近悲情難撥述懐一首并一絶 贈二掾大伴宿称池主一

大伴宿称家持

かきつはた衣に摺つけ着む日乎いつかと待ハ久しかりけり

仍日二上山云々

ふたかみの山にしをれハ子ほとゝきしきなくさとハ聞ゆれとも

をちかへり又安云々

ほとゝきす二つとの名ハ聞けれとも未し被聞

お花しとき八又雲間乃しきつと云ふ心なるへし神中物云物をとりこと云ふ歌

わりなきや今池主と云てしらさりて又安云々

あしひきの八峯乃ほとゝきすいたくな鳴そ我恋まさる

河波

ほとゝきす鳴渡る野乃なつかしくわれ思ふ時に来鳴とよもす

佐和久

うの花の咲ける垣根にほとゝきすしきなく朝ハ来ても聞かも

ほとゝきす来鳴とよもす卯の花乃伴ハ吉野の山にしあるらし

風こと出でて寒気の候
中ちかの時節柄ご安
心下さいまし、東風を
あいかわらずとも云
うことをしかやかま
しくこれ
をすまされいご安心
すべきかちめ
すまされいご心配を
みそうまし
みそうともち仙台国
也ものさいご寒苦を
持く祖母さまと
をれまきみそ

そこをしあやふこそ〳〵みそのひつ
つちうぶさうりをすめるきかを
ふまれいみそこそこそちわれおい
をれるきみそいあれ〳〵まそこの
みちくわれいさ〳〵それ〳〵まいく
やまとそれねみそこ〳〵ちりおいこれさ
けく けかちうぶくんうぶうこそこ〳〵で
こそ〳〵いそ〳〵なく〳〵きすこそよ
あめく〳〵まちうぶてふやきこそち
てかさそこそゆんを

池主いまし別条なく
こ〳〵ちりおいこれ
一カちうぶ
ゑさげ〳〵けのちうぶん
ゑ前く欲りくんこと
うこと〳〵いうこと
おりくこと〳〵こと
こそうあめくまし
まちうぶこ池主をこそ
りんをまくいわちうぶ
わをこいまちうぶ
断腸萬回ちわを
一こうすそうこそ
悠緒難禁別乃こと
やめくさきみ

をきくいうそ

反歌

わをこいまちうぶもしぶちうぶきす
こそうあめぬきこまちうぶきそいりん

五月二日忽見テ京ノ述懐之作生別ノ
悲断腸萬回悠緒難禁聊奉所心報ノ
和歌一首并二絶

あしときゝてれ末
離し越中ニまかりて
わかせこを 家持を云
おもひやる 心をやるを
いふに同し 慰めに
あれど家持を見れハ
心をやり慰む様を
上京あらんするを云
をすくにを云 食国(ヲスクニ)
あゆひ 仙日てぎ云
あゆひとハいふとそ云
あしとを手ふ事の始て
生める事ハ葦のを
わかれれハあかれ
ことよみて云
うかり 足のこぎ

大伴宿祢池主

あをによしならをきはなれあまさかる
ひなにはあれどわかせこをみつゝしをれは
おもひやることもありしをおほきみの
みことかしこみをすくにのことゝりもちて
わかくさのあゆひたつくりむらとりの
あさたちいなはおくれたるあれやかなし
きたひにゆくきみかもこひむおもふ
そらやすくあらねはなけかくを
とゝめもかねてみわたせはうのはな

ことよみさ留之
なけかくを 歎くを
也 家持の旅立ゆけハ
我やかなしからん君や恋
ひうんとふ云ふ
安くあらねハ 歎く之
ねのみなかゆ 音のみ
なかるゝ也 乱るゝ之
ことに出ていはゝゆゝし
口出あれハいみそ 副
のみよりゆゝしふ云之
となみ山 和名越中
礪波郡ニ関あて
たむけする所の
たむけのかミ 和名
道神 タムケノカミ

やまのほとゝきすねのみしなかゆあ
さきりのみたるゝこゝろことにいてゝ
いはゝゆゝしみとなみやまたむけのかみに
ぬさまつりあかこひのまくはし
けやしきみかたゝかをまさきくも
ありたもとほりつきたゝはときもか
はさすなてしこかはなのさかり
にあひみしめとそ

反歌

たまほこのみちのかみたちまひはせん

あらこひのもく　吾請　祈ぬやりふさ子をあつりみせよ
祈るこひのむの忠　うらこひーわりせのきみへをてこう
そけやし神中拙公　をおみもかもしもあきおさおそん
そけやーそきよ　しも同様ようさ
しも同様ようさ　みる祈心畏怪さ子をおそてくる祈心そう道神ふれる祈心
きそうーくをそ安云ーてくるきう同さるうハ寝ふこく
まきく　真幸心　祈のーこととりてとこ
祈もかさす　祈をもへ　をしちとりて置もそ祈つりをしする
あく拙よのさりをしへうあひそせわのくとる神よこひのむと
しるおこれをもれ神主　弊ハ女んし代子家拙とおつくきするの
うこひーわりせのうそーハ忘るせ心わりせのさ子ハ家拙とおこ
思放逸鷹　九月二十日思放逸鷹夢見感悦作
歌一首并短歌

守大伴宿祢家持

養吏　斎をロつあし山
田ハ姓史ハふねる名九
ハ名し
調試失第　斎るのる
らつーりとるるね
野猟班候　祈とる
よ叶ふるふこを叶候
にうむるし

使君　岡ち九唐名し
秘笈新書ニ裴使寺ノ
河北号ス獨立使君ト
却恨之歌ヲ入圖し
怪て却恨ノ

射水郡古江村取獲蒼鷹形容
美麗勢雄秀群也於時養吏山
田史君麻呂調試失第野猟班
候搏風之翅高翔匿雲腐鼠之
餌呼留糜験於是張設羅網窺
平非常奉幣神祇特乎不虞也
粤以夢裏有娘子喩曰使君勿
作苦念空費情神護得彼放逸
鷹未幾矣須臾寤有悦千懐
因作却恨之歌式旌感信

おほきみのとほのみかとそみゆきふる
こしとなにおへるあまさかるひなにし
あれは山たかみ河とほしろし野をひろみ
くさこそしけきあゆはしるなつのさかり
とこしまつとりうかひかともは
ゆくかはのきよき瀬ことにかゝり
さしなつさひのほる露霜のあき
にいたれは野もさはにとりすたけりと
ますらおのともいさなひてたか
はしもあまたあれともやかたおの

おほきみれとをのみかと
是申し大王の御事也
河とほしろし 遠白し
そのかく明白の意
草こそしけり 仙白鶴を
云けむ鳥をさる故
絶海に住鳴け鳥を
云し番東ニて鵜の
うとまりは鵜飼
乃やかにうんされし
なつさひのほる所に
付て鵜飼のならし
野もさはに 多サハ
こかすたけり 鳥集之
ますらお 猛人に
矢形尾の 鷹家持公

わかおほくろにしらぬりのすゝとりつけて
あさかりにいほつとりたてゆふ
かりにちとりふみたておふことに
ゆるすことなくたはなれもをち
もかやすきこれをおきてまたはあり
かたしさならへるたかはなけんと
こゝろにはおもひほこりて
ゑまひつゝわたるあひたに
たふれたるしこつおきなのことたにも
われにはつけすとのくもりあめ

矢の形に似たる尾の
鷹也 矢形尾と云
おほくろ 此鷹の名を
大黒と云よし注あれと
秘説の故わりなし可尋
とうふみたり
いほつとり 五百鳥也
ちとり 千乃鳥之兄
兄安云何まての鳥之
安云あまたの鳥之
日本とにゆるすゝて
鳥を進みみえて
やすきなきをゆる
すすむともと
こえれも兄安云
あを弱つるゝ

もちをしかやすきこと ま二
居くすかきし安き
さかくてる さやうり
留てる鶴かゝりんとと
多しつて 凡安云
を平はくし
しかすてる事あ義
仙曰しかれるは乃れし
しるをと云之ことゝは
西と云語之要集にわ
けるかうき義之さ
はのはハ助字之山田
史君麻呂と云注二見
とかり 多精之多年
と精ともくし
三鳴野 八雲抄 採中きと

乃かゝる月をとかりすと ゆめのとゝのか
て三鳴野をすぐひよみて ゆき 二
上ゐ花山とひとてくもがくれ
あはゆきとかゝきて しふれは
それさくらの花ふさけれは
すみのかきをもてかゝふはさへ
こもつおもひこいきつきあまる
けりしもかくとありやとかく
ひきれさそもこれもかゝらみ
なりふりへをすゑてちりやふる

くもかゝり 雲隠之義なれからとこと
しくかれはくれ 凡安云しよもさし要集しりかきくれりしらしそ
かきく 君丸 身をさくしあさき事也
みすみのてきをしいふ そふりの家持の鶴をおもひて
心ふハ父さへをして なかひこゝうしに けさしくをハ蓋之
ゆりひきれおても 山のおもてはおもてし こゝなゐハ多綱 門人あり
しづみかうへ 仙曰
四月之要集序小張
説羅綱窺平非常
奉幣神祇特平不虞
也といへるぞ
こゝのみて 凡安云
もふ之要集もふ之
いめまたくらく 夢ふ
嫦娥か告るとし
かつらの凡安云悟も夢也

神乃社まてゐる繞 しつかなかゝへ
之都
こゝのとてありかつこさまおとめ
りいめふたくらくあかこふる
保追多加
そのかつらは まつしく乃ゐ
都奈之 麻追太要
ゆきそしはなしふるひなのに
ゐてしこれまよとひことゝのり

松田江の濱 拔中
汗あゆる仙回魚の
名乃足安云鮒
比美の江 足安云拔
中ひぐこ云下
ここの与回 拔中
うひこととり 記
立てとり
古江 拔中
なつ日足安一吐る
いまつつこと 仙回
矢尾云尾のみれ矢
のおのやまはる
ふるみのそもこれ
もちふよ
ゆりこひて
仙回よりれてゆる
よりてゆるもと
えこさ山回れもち八
譽父山回史ことち
光義 日本紀 老翁
こころよいふこと
乃安云心の縁つちる
るちくこすちくお
みちくこ重栗 萩山

安之日
ゆつもれすくみる汗よをろ
ひもきのもいけりちくあ八
大未イ米ら
いまみつるみとをくのハおねろ
りちハすきめやとさあんわ
せこれもこそよおこひうとろ
伊麻
矢形尾
大黒者蓄
鷹之名也
反歌
やつ〜おれ多加
かねおくほきろへよろる
二上
みきみのおもしこれにあみきて

多可
ゆつもりのを伊米
須加能夜麻
おちちき月よととめあらすん
ろろかいまみことあくすのやは
すちくのみやこいちちん
一首 年月不審 三國真人五百國傳請之ヲ
高市連黒人 於之奈倍
責北能野
めしのれすきもちくみる於毛倍遊
やとりるくみ
天平二十年春正月二十九日作

歌四首　大伴宿祢家持

東風　奈呉乃安麻

あゆの風　平布祢流須流

都利須流　可久流流

作業する　東風越俗語謂安由乃可是

奈呉乃　可是

みなとに　多豆

浦波の　依和久

一云　よせくる

うらなみの　波麻

しくしくし　由伎久良之

ちかきこの　波麻

うらにしあれば　由伎久良之

このころの　波麻

信濃の海を　由伎久良之

かうばしみせり

信濃者濱名也

春出挙巡行諸郡當時所属目

作歌九首　大伴宿禰家持

礪波郡雄神河邊作歌

平加未河伯

をかみの　芦附

川瀬の　端

石迹渡せる

葛附者水松之類

娉婦負郡渡鷲坂河邊時作歌一首

娉メ婦イ　負ル郡ノカミノ

娉婦の　鷲ノ坂ノ

うさかにわたる　鷲ノ坂ノ

安我枳 義通

あさまだきこぎいでぬれかくり

見潜鷗人歌

賣比河伯 可我里

めしつれそやさ漕こにつどさし

夜蘇營毛乃坪

やそうものおいうえもちくり

至新河郡渡延槻河時作歌

もちほのほきたらしもこつきの

かえりこみにおふみにしるす

赴参氣比大神宮行海邊之時歌

之乎略 可良 波久比

もちかくしてこしたしいえの海

あさおきちりみね梶もし

過能登郡從香嶋津發船射熊來

村徃歌

今日 備前

ふさこそ船来きてと小縄やしの浦山

香嶋 久麻吉

かまくりもとりつけとくく神てう

京都

かちらるまもくみやらおもおい

赴鳳至郡渡饒石河時歌

亦藝之河波

こしおありすいさきちりぬかきしの

宇良波倍 氐奈

きよきこ漕こちしにみおうてお

從珠洲郡發船還太沼郡泊長濱

灣見月光作歌一首

珠洲(スズ)

すゞの海(ウミ)に月の光(カゲ)のさやけくて見(ミ)まくほしきは妹(イモ)にぞありける

安倍比良伎

都奇

ありそみにうち寄(ヨ)する浪(ナミ)いやしくしくに戀(コヒ)まさらくは何(イカ)にせむとか

大伴宿禰家持

うらもなくいかにおもひてか月を見(ミ)て妹(イモ)に戀(コヒ)むと人(ヒト)に語(カタ)りけむ

大伴宿禰家持

戀悲嘆歌一首

敷刀能里等其等

おくれゐて戀(コヒ)つゝあらずは高山の磐根(イハネ)しまきて死(シ)なましものを

大伴宿禰家持

造酒歌一首

敷刀能里等其等

あをによし奈良の都(ミヤコ)の荒(アラ)れまくをあたらしみと平城(ナラ)の京(ミヤコ)を思(オモ)ひかねつも

あをによし奈良の都(ミヤコ)は咲(サ)く花の薫(ニホ)ふがごとく今盛(サカ)りなり

萬葉集巻第十七

貞享三年六月二十九日書于新玉津嶋寶前墨付四十二枚 季吟